

北海道における 通俗図書館設立の経緯、その2

—札幌市女子小学校戊申文庫を例に—

谷 口 一 弘

はじめに

明治23(1890)年10月、改正された「小学校令」のなかで図書館については、「市町村ハ幼稚園図書館盲啞学校其他小学校ニ類スル各種学校ヲ設立スルヲ得」（第40条）と規定され、以後この条項が図書館設置の法的根拠とされていて、単独立法としての図書館に関する規定はなかった。

その後、明治32(1899)年11月10日、「図書館令」が公布された。法制上からも学校教育から分離された最初の単独立法として、その意義は大きいものといえる。この明治32年の「図書館令」以後、全国の市町村において図書館設置の傾向へと向うなか、この流れが日露戦争を契機として、さらに強まるとともに、その設置の過程で図書館の通俗図書館としての性格が色濃く付加されていくことにもなる。

すなわち、政府は日露戦争勝利を国家的慶事と捉えることにより、高揚されたナショナリズムを巧みに誘導し、国民教化策の徹底を図ることで、日露戦争後の国家経営遂行のためにも、地方における民衆教化活動の一つの重要な要素として図書館普及が急務とされたことが背景としてあった。

明治後期から大正、昭和戦前期における図書館の全国的推移をみると、「図書館令」公布の明治32年は38館、日露戦争の明治37(1904)年は100館と三桁を示し、同45(1912)年には541館、大正5(1916)年には1,092館を数えるまでに増加している。このような急速の増加傾向はその後も続き、昭和5(1930)～15(1940)年間のピーク時には、ほぼ4,600～4,700館を推移していた。

本稿は、この時代のこうした図書館を巡る全国的諸情況のなかで、北海道における通俗図書館を、明治42(1909)年2月開設の札幌市女子小学校に付設の戊申文庫を通して、その設立の経緯と活動の実際を検証しようとするものである。なお、本稿は前回報告の札幌市北九条小学校の事例⁽¹⁾に続くものである。

1. 国内における図書館の動向

明治20(1887)年3月開館の大日本教育会附属書籍館は、それまでの図書館が普通教育の補助的な施設としてその機能が求められていたのに対し、「通俗図書館の模範として設置されたものであり、教育団体の設置ではあったが、図書館の新しい類型を創る意味を」⁽²⁾もつものとして迎えられた。その通俗図書館としての理念を

主トシテ通俗近易ノ書即チ解シ易クシテ益アリ、面白クシテ害ナシ、所謂利益快樂両得スベキノ書籍ヲ蒐集シ、以テ学校生徒商工業徒弟其他年齢ノ少長ニ関ラズ、職業ノ如何ニ関セズ、凡ク庶人ニ斯ル書籍ヲ閲覧セシメ、又之ヲ貸出シテ不知不識ノ間ニ読書ノ嗜好ヲ養成シ、智得ヲ増進セシムル」⁽³⁾

ところにあるとされた。これは、明治23(1890)年、当時の文部次官でかつ大日本教育会会長辻新次が、同会附属書籍館の新築書庫落成式での演説である。そこには、図書館をして読書による国民意識の形成と、学校教育を補完するものとしての役割の両面を期待せんとした意識が窺える。

こうして大日本教育会附属書籍館で示された通俗図書館の理念が、図書館の「思想善導」の機関としての役割を明確に示すものであり、この後の全国各地に設置された図書館のモデルとされた。北海道にあっては、明治32(1899)年開設の北海道教育会附属図書館へと繋がるのである。

明治末期から大正にかけて、一般に大正デモクラシーの時代とも呼ばれ自由民権運動の影響のもと教師、労働者、あるいは農村青年たちによる読書施設としての小規模の図書館や学校文庫などが盛んに創られた時期でもあった。だが、日清・日露の両戦役を通じて急速に発展した日本は、同時に国内的には政治・経済・社会的に多くの不安と動揺、さらには矛盾が顕在化した時期でもあり、国家の側からみた不安や矛盾に対処する方策が急務でもあった。

このような時代背景のなかで、「思想善導」機関の一つとしての通俗図書館の性格が、更に具体的展開をみせていったのが、明治40年前後からの「地方改良運動」の流れである。内務省を中心に文部省、農商務省、財界人、報徳会等を加え推進されたこの運動の指導理念は、「一村一家観念、分度推譲、勤儉貯蓄等を基軸とした親睦協和と勤労精神の鼓舞であり、この思想的根拠は報徳精神に求められた。」⁽⁴⁾

その担い手となったのが、町村長、吏員、学校長、教師などいわゆる地方の名望家・有力者たちであり、やがては労働者や青年たちもその傘下に取り込まれていくことになるのである。

図表1 図書館の変遷

年 度	北海道	全 国
明治40	3	151
41	5	200
42	7	281
43	7	374
44	7	445
45	10	541
大正 2	11	625
3	11	708
4	10	900
5	12	1,092
6	13	1,237
7	14	1,359
8	16	1,511
9	13	1,670
10	13	2,055
11	15	2,390
12	16	2,937
13	16	3,404
14	16	3,904
15	16	4,337
昭和 2	15	4,306
3	16	4,490
4	17	4,553
5	15	4,609

『文部省年報』による

彼らを中心とした報徳会・教育会あるいは青年団・処女会等を通しての活動が、それまでの良書普及による思想善導からさらに踏み込んだ、民衆教化活動としての地方改良運動の具体的な地方経営策の一つとして、通俗図書館に求められたものである。

図表1は、明治40(1907)年から昭和5(1930)年までのわが国の図書館数を北海道と全国別にみたものである。この表で明治40年の151館を起点とすると、明治45年までは毎年ほぼ50～100館程の増加である。

その後、大正5(1916)年に1,000館を超えてからは急速の増加を示し、10年後の大正15(1926)年に4,000館台に乗ってからは、昭和15(1940)年頃まではほぼ4,600館前後を推移している。北海道の場合は、全国的傾向程著しくはないが、大正11(1922)年以降は15,6館を維持している。

このような伸びを示した背景には、先に述べた「思想善導」から「地方改良運動」へと、通俗図書館として与えられた国民教化の機関としての役をさらに加速する「訓令」が発せられたことである。

明治43(1910)年小松原文相の「図書館施設ニ関スル訓令」⁽⁵⁾がそれである。

図書館ノ施設ハ規模ノ大小ニ応シテ取捨斟酌宜シキヲ得サルヘカラス近時各地方ニ於テ設立セラルル通俗図書館又ハ小学校ニ附設スル図書館ノ類ハ施設其宜シキヲ得ルトキハ小学校及家庭ノ教育ヲ裨補スル上ニ於テ其ノ効益尠少ニ非サルヘシ而シテ此ノ類ノ図書館ニ在テハ健全有益ノ図書ヲ選択スルコト最肝要ナリトス故ニ成ルヘク其ノ施設ヲ簡易ニシ(中略)以テ十分ノ効果ヲ収メンコトヲ期セシムヘシ

このような期待が「健全有益」な「図書」を収集した、小学校付設の簡易な通俗図書館設置が全国的傾向となるのである。しかし、その建物としては殆どが小学校等の一部の間借り状態であったが、本稿の戊申文庫や前稿で紹介した札幌市北九条小学校附属通俗図書館の例のごとき独立の建物による設置は、恵まれた環境にあったといえる。

2. 戊申文庫付設の経緯

明治44(1911)年2月28日、新聞『北海タイムス』に「札幌の三図書館」として、当時の札幌にあった札幌市北九条小学校附属通俗図書館、北海道教育会附属図書館そして札幌市女子小学校戊申文庫の順に3日にわたり取材記事が掲載された。この当時、いわば明治後期から大正にかけて、札幌市内で公開されていた図書館の現況をレポートしたものである。札幌市女子小学校戊申文庫については、次のような書き出しで紹介されている。

戊申文庫は北1条西4丁目1番地女子小学校の構内にありて総坪数40坪の木造平屋建にして10坪の石造書庫附属せり門を入れば正面に広島村大曲産の水松樹円蓋の如く移植せられて緑なし此処より左折する数間文庫の入口に至る建物の瀟洒にして典雅なる点より縦覧者の多く凡て整備せる点より見て三図書館中第一位に推さざるを得ず⁽⁶⁾

この女子小学校は、現在の札幌市大通小学校の前身である。札幌市大通小学校は、その沿革資料によれば

我が札幌区ハ明治19年4月区内公立小学校ヲ合一シテ創成小学校及ビ分校ヲ設置セシガ爾来年々増加セルヲ以テ22年3月札幌区総代人会ニ於テ創成本校及各分校ノ女兒ヲ分離シテ女子小学校ヲ創立スルノ議ヲ決シ⁽⁷⁾

明治22(1889)年7月15日開校したものである。

当初は、「札幌区北1条西4丁目北海道庁官舎敷地に札幌区創成小学校より女兒511名を分離して本校を創立し札幌女子小学校」⁽⁸⁾と称した。開校当初は、尋常科408名、高等科103名の児童数で、尋常高等両科併置としてのスタートであった。その後、大火での校舎の類焼や児童増による校舎の増改築、学校組織の改変などを経て、明治37(1904)年札幌女子尋常高等小学校と改称された。

明治41(1908)年7月15日、創立20年記念祝賀会が同校同窓会によって举行され、併せ「同窓会が同校創立二十年を記念するため」の記念事業しと

て「同校附属記念文庫」⁽⁹⁾の設置が計画されたものである。記念文庫設置の計画は、

之れが建設の費用は昨年(明治40年)の7月15日に行った所の創立二十年祝賀会の費用を合して3,500円の予算であつて此財源は広く有志の寄付に求めたのであるが其後予算に1,000円の不足を生じて更に寄付を募る事となり幸ひに同情を得て今回の成功を見るに至つたのである。⁽¹⁰⁾

この記述からみると、祝賀会用の拠金が予想以上に多く集まり、結果としてこの残金の使途を検討する過程で時局に即応した記念文庫の設置が企画され、急遽不足額の寄付を募つたところ「其寄付人員は実に1,430名の多きに及む」⁽¹¹⁾に至つたものである。

こうして計画された記念文庫であるが、工事着工の日付に関して現在、筆者の手元にある資料では3種の日付がみられる。すなわち、月日の順でみていくと、その1つは「記念文庫は来る5日より起工することとなり」(『北海タイムス』第6426号 明治41年9月2日)とする明治41年9月5日説、2つに「9月8日記念文庫建築に着手す」(『学校沿革史』)⁽¹²⁾にみる明治41年9月8日説、そして「書庫及閲覧室は共に昨年(明治40年)の10月1日より着手して同年11月25日竣工を告げたもの」(『北海タイムス』第6580号 明治42年2月14日)の明治41年10月1日説とである。

「9月5日」説は、記事掲載の新聞発行日が9月2日であることと、「同文庫の竣工期は10月27日にして開庫式は11月3日の天長節を卜して挙行する予定なりと云う」⁽¹³⁾とあることから、「9月5日」は今後の工事日程を基に記述された記事であり、実際の起工日は予定日が変更されたものとみるべきであろう。

「9月8日」建築に着手したとする『学校沿革史』は、年表形式に編集されており、戊申文庫に関しての記述はこの9月8日の件も含め全体としては、僅かに6件の記述のみである。特に、この明治41年9月8日の記述

以降、大正13年まで一切の文庫に関する記述がみられない。一般的には、資料としての信頼性の高い当該機関の沿革資料ではあるが、その記述が昭和13年以降に一括して編集されたと推察されることから、9月8日説に疑問があるといえる。

「10月1日」説にしても、これを裏付ける資料が確認されていないが、新聞『北海タイムス』の2月14日付記事は、同月11日開館の取材記事であることから「10月1日」説は信頼してよいものと思われる。

また、記念文庫の竣工月日に関しても2種の記述がみられる。その1つは、先の『北海タイムス』（第6580号）の記事にみる「今年の10月1日より着手して同年11月25日竣工」とある「明治41年11月25日」と「サテ創立を聞くに明治41年7月15日札幌女子小学校創立二十年記念の為め同校同窓会相謀り設立したるにして翌年1月工事終了し2月11日紀元佳節に開館式を挙行せり」⁽⁴⁴⁾にみる「明治42年1月」である。

「11月25日」竣工とすると、翌年2月11日の開館では竣工から開館までにほぼ2か月半の期間があり、開館準備期間としては少々長期間の感が否めない。こうしてみると記念文庫については、起工「明治41年10月1日」竣工「明治42年1月」（正確な日は不明）とみるべきであろうか。開館日については、先の記述にみる「明治42年2月11日」でいずれの資料も一致している。

3. 戊申文庫の開館 (1)

こうして記念文庫は、明治42(1909)年「2月11日の紀元佳節に開館式を挙行」したのである。文庫としての建物は、「女子小学校の構内にありて総坪数40坪」⁽⁴⁵⁾「書庫は石造瓦屋根の2階建て10坪と云うチンマリとしたもので閲覧室は事務室兼用で4間に8間と云ふ清楚した木造の平屋である婦人の閲覧室は31畳敷の大広間で立派な床の間まで付いて居る。」⁽⁴⁶⁾

すなわち、2階建て石造書庫と平屋の閲覧室の2棟が同時に整ったこと

になる。閲覧室は、男子用が事務室との兼用で用意されたのに対し、「女子の閲覧室がお座敷然たるのは単に女子の閲覧者たるが為めではなくして健全なる小集会の為めには広く一般の需めに応ずると云ふ趣意に基いて出来たるが為である。」⁽¹⁷⁾

記念文庫の名称は、「戊申文庫」と命名された。この名称にいたる経緯は明確ではないが、「戊申」の名称は、当時の通俗図書館としての性格を如実に物語る象徴的ネーミングであるといえる。

明治後半から大正にかけて設置された図書館の多くに共通してみられる特徴のひとつに、その図書館に冠した名称にある。いわゆる、国家的慶事に因んだ命名が多くみられるのである。明治後半期は、「日露戦役記念」など戦勝記念としての設置による名称が多かったが、その後は「御成婚記念」「御大典記念」「行啓記念」といった皇室の慶祝に肖った名称が特徴的にみられるのである。

戊申文庫も、明治41（戊申の年）年10月13日に発布の戊申詔書奉戴を国家的慶事とした名称によったものであり、この時期の札幌市内小学校に付設の文庫等を挙げてみるとまさに、この時代の要請を体現した典型例としてみることができる。

- 明治42年 女子小学校（大通小学校）戊申文庫
- 大正 5年 豊水小学校大典記念豊水文庫
- 9年 山鼻小学校みゆき文庫
- 11年 みゆき文庫東宮殿下行啓記念第1次拡張
- 13年 苗穂小学校御成婚記念文庫
みゆき文庫東宮殿下御成婚奉祝記念第2次拡張
- 14年 みゆき文庫御成婚満25年奉祝第3次拡張
東北小学校昭宮御降誕記念文庫
- 15年 みゆき文庫皇孫殿下御降誕記念第4次拡張
- 昭和 3年 苗穂小学校聖成殿下御成婚記念学年文庫

4年 苗穂小学校御大典学級文庫

こうしてみると、図書館・文庫の設置には、いかに国家的慶事を契機として用意されたものが多かったかが窺える。

4. 戊申文庫の開館 (2)

明治42年2月11日の紀元節を期して開館した戊申文庫は、その目的を「広く公衆に一般的通俗的の知識を供給する」⁽¹⁸⁾としたが、「今は単純な文庫に過ぎないが近き将来に於ては図書館規則に依る組織的のものと」し「其方法としては戊申文庫協賛会なるものを起して（中略）一定の会費を徴収して」文庫の維持・管理することを将来の計画としていたことからみると、開館当初は閲覧規則もない仮開館としてのスタートであったようである。

開館時間は午前9時から午後4時までで、「特別の場合を除くの外は毎日必ず開館」し「学校教員学生生徒は無料で其他は閲覧料として一回2銭を払はねばならぬ同時に閲覧し得べき図書は洋書は3冊で和書は5冊である」。これは、新聞『北海タイムス』第6580号（日付は2月14日）にみる開館直後のものであるが、次の記事は、開館からほぼ1月経過した状況が『小樽新聞』に掲載されたものである。

日々縦覧人多く28日までには会員及び外来者男59女5 教職者男1女1 学生男21生徒男 442女 925合計 1,482人に達したり閲覧の図書は会員及び外来者は文学最も多く歴史、地理、理科、倫理之に亞き生徒は世界伽話類のみにて毎日学校退出後集まる小学生は閲覧室に溢るるばかり殊に日曜日は非常の多数なりと⁽¹⁹⁾

記事内容は開館しておよそ2週間、1日平均100人程度の利用と順調なスタートとみられるが、「特別の場合を除くの外は毎日必ず開館」が実行され、日曜日開館は殊の外好評のようであった。また、この記事にある会員とは、直接にそのものを示す資料は確認されていないが、先に文庫設置

に賛同し寄付に応じた同窓会員と女子小学校教職員を指すものとみてよいであろう。

続く3月の利用も順調のようである。

戊申文庫3月中の閲覧人員は小学生 3,014名中学生 175名高等女学校生徒 102名其他42名合計 3,333名の由なるが最も多く読まれるものは少年の読物にして次に文学次に理化歴史倫理教育数学医学地理等の順序にして文学に属する書籍中最も多く読まれるものは不如帰、紅葉全集、巖窟王、我懺悔、樗牛全集、無花果両美人、筆のしづく、沙翁全集、校中徒然草、海賊等にして雑部にては絶島漂流記、漁釣新書、人生観、スケッチブック等なりと云う⁽²⁰⁾

開館月の2月、そして翌3月と順調に1日平均100名を超える利用となっている。また、ここでは、文学関係の書籍に利用が集中し、特に徳富蘆花の「不如帰」、尾崎紅葉の「金色夜叉」が、黒岩涙香の「岩窟王」あるいはシェイクスピア作品集などが当時の人気作品として挙げられており、このことは同時に通俗図書館の性格を示す蔵書構成の一端を示すものでもある。

しかし、開館した明治42年度の蔵書は、統計上では537冊でこの時点でも絶対的な蔵書不足であったことは否めない。当時の図書館の蔵書冊数をみると、文部省調査による大正10(1921)年3月現在の全国の状況は、「之によれば、総数千六百四十館の中五百冊未満の図書館が約半数を占め、五百冊以上、千冊未満を加ふれば、実に六割二分以上である。更に、五千冊以下とすれば実に九割五分で、殆んど全部が五千冊以下の図書館であると称しても差支がない」⁽²¹⁾のが実態であった。つまり、蔵書冊数千冊未満の零細ともいえる図書館がその大勢であり、戊申文庫もその例に洩れず文庫としての活動の限界を暗示するものである。

図表 2 戊申文庫統計

年 度	蔵書冊数			開館 日数(日)	閲覧人数			閲覧料 (円. 銭)	経費 (円. 銭)	備考
	和書(冊)	洋書(冊)	合計(冊)		男(人)	女(人)	合計(人)			
明42	524	13	537	289	—	—	22,178	2.700		
43	1,413	16	1,429	322	9,344	1,869	11,213	1.200	618.000	
44	1,413	16	1,429	327	8,562	16,029	24,591	1.580	?	
大元	1,429	16	1,445	323	5,607	13,888	19,495	620	?	
2	1,429	16	1,445	317	4,608	14,001	18,609	—	—	
3	1,429	16	1,445	315	1,835	12,018	13,853	—	210.000	
4	1,429	16	1,445	326	3,913	11,916	15,829	?	?	
5	1,907	16	1,923	303	156	6,027	6,183	—	?	
6	1,140	28	1,168	130	—	520	520	—	90.000	
7	1,160	28	1,188	207	—	6,210	6,210	—	43.500	
8	1,247	28	1,275	192	—	8,640	8,640	—	66.000	
9	1,255	28	1,283	204	—	6,000	6,000	—	477.000	
10	1,257	28	1,285	173	—	450	450	—	45.000	
11	1,258	28	1,286	—	—	—	—	—	—	
12	1,258	28	1,286	—	—	—	—	—	—	
13	1,553	28	1,581	150	2,400	123,200	125,600	—	270.000	
14	1,615	28	1,643	212	384	1,113	1,497	—	170.000	児童文庫
昭元~8	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	
9	1,180	—	1,180	110	3,510	3,050	6,560		150.000	児童文庫
10	1,230	—	1,230	115	3,650	3,590	7,240		150.000	〃
11	1,310	—	1,310	118	3,700	3,650	7,350		150.000	〃
12	1,410	—	1,410	118	3,700	3,680	7,380		150.000	〃

『札幌区統計』(明治42年),『札幌区統計書』(明治43, 44年),『札幌区統計一斑』(大正元~9年)『札幌市統計一斑』(大正10~昭和12年)による。

文庫は、大正4年ころまで順調な利用状況を示していたようであるが、その運営の詳細は明らかではない。文庫の維持には、基本的には同窓会を中心とした会員組織(会員約1,200名)による会費と若干の閲覧料収入によるものであったが、図表2にみる統計上の閲覧料も明治42~大正元年までの僅か4年間のみである。「経費及び維持法を聞くに明治43年度予算は618円にして館長及び評議員の寄附閲覧料之は学生生徒教育関係者寄附

者新聞記者は無料なるを以て年額僅々3円位なり」⁽²²⁾とあるが、それでも同年度の札幌市北九条小学校附属通俗図書館の経費234円の倍以上となっている。⁽²³⁾しかし、閲覧料収入が大正2年度からは計上されておらず、経費欄も空欄が目立つことから、実態は財政的基盤が不安定であったことが窺える。

日常の文庫経営は、「現今の館長は小川幸太郎氏、事務長は嶋村清松、掌書長は五十嵐スズ井評議員は札幌女子小学校職員一同、事務員は奥村嘉仲の諸氏」⁽²⁴⁾が担当していた。いわば、同校校長小川幸太郎が館長兼務で、以下教職員により文庫の維持・管理に当たっていたものとみられる。

大正5年度までの開館日数は年300日を超えており、休館日は「紀元節学校記念日曝書期(7,8月中凡5日間)天長節歳末館内大掃除毎月1日16日又開館日は4月1日より9月31日迄午前8時より午後5時迄10月1日より3月31日迄午前9時より午後4時迄」⁽²⁵⁾と戊申文庫開館当初から、ほぼ一貫した運営方針が維持されている。

さらに、

将来は札幌女子小学校の附属図書館とすべき条件下に札幌区に全部寄付の見込なりと云へり兎に角いま少しく規模を拡張し外来閲覧者の為め一二室を増築し便宜を与へなば本区唯一の通俗図書館たる疑なかるべし⁽²⁶⁾

とこれも、当初からの方針として、文庫開館は当面は暫定的経過措置として、近い将来に通俗図書館として機能することを意図していたことが窺える。

だが、こうした関係者の意気込みや努力にも関わらず、文庫としての実質的活動期間は短かった。蔵書冊数では、2,000冊を超えた年度はなかった。僅かに大正5年度が蔵書冊数1,923冊と前年比プラス500冊となっているが、それも翌年度には原因不明のまま1,168冊にまで減少し、その後は、ほぼ1,200~1,600冊を推移している。

閲覧収入が、大正元年の62銭で終わっており、以後の記載が無いことからみると、この時点で閲覧料徴収対象者の利用が無くなったことを示している。利用対象者を限定したものなのか、その理由は定かではないが、この当時の状況を窺い知る次のような「暮れの図書館」と題した新聞記事がみられる。⁽²⁷⁾

北海道教育会の図書館は（中略）書物は数にして幾万冊を数へるであろう併し多くは陳腐の古書と雑誌新聞のみで新刊物は余り見受けぬ其れも其筈毎月購入すべき予算は僅々で新雑誌購入の余裕もないとの事（中略）実に名計りの図書館で一向振はぬとの事去らば何曜日一番閲覧者があるかと訊ねたら左様先ず日曜日午前位で昨年暮よりは少し計りは多い様だが此雪では足の運びも稀だと長息して居った札幌唯一の図書館の景況は先づこんなものである此他北駕文庫⁽²⁸⁾北九条図書館⁽²⁹⁾戊申文庫等もあれど何れも其学校の附属といふ有様で閲覧者も当該校の生徒のみで余り一般の人に利用されて居らぬ

と、北海道教育会附属図書館の低調な利用状況が描きだされているが、同時に挙げられている北駕文庫や北九条図書館、戊申文庫については、あくまでも学校図書館の延長線上にある図書館との認識であることが読みとれる。

また、「余り一般の人に利用されて居らぬ」のは、一般の人の利用がすでに殆どない状況を示している。戊申文庫の大正元年の閲覧料62銭は、一般人の閲覧料1人2銭として31人分の金額計でもあり、年間その程度の利用ということも、記事内容を物語っているともいえる。

5 戊申文庫のその後

戊申文庫の統計上からみた利用のピークは、文庫開設の明治42年から大正4(1915)年までである。大正5年には、利用者数が前年比でおよそ40%程に下降し、同6(1917)年からは利用者数の集計が女子のみの数字となっ

ている。これは、利用対象を札幌女子小学校生すなわち、同校児童・生徒に限定した、いわば学校図書館的機能への方向転換した結果とみてよいであろう。

ただそれにしても、利用者の集計数値だけをみると520人、6,210人、8,640人、6,000人等不自然さを感じさせる。昭和9(1934)~12(1937)年も同じ傾向が続いているが、特に、大正13(1924)年の125,600人という数値は、極端に突出した数字として目

立っている。これらの数字は、単年度での集計結果としてみると不自然さはさほどではないのかもしれないが、一覧表として見てみると大正6(1917)年以降同14年を除いた蔵書冊数、閲覧人数(男、女、合計共)の数値にやはり不自然さが見える。

ところで同校は大正6年4月、創立当時の学校所在の北1条西4丁目から大通西11丁目の現在地に校舎を新築移転している。続く同9(1920)年4月には、「女兒単置ヲ改メテ尋常科第1学年ヨリ男児ヲ収容」し男女共学へと移行している。

この男女共学への移行が、大正13(1924)年からの図書館利用統計に男女別の集計となって再掲載されることになった。ただ、男女共学になってから大正13年までの間、利用統計に男子の数字が未掲載なのは、低学年児童の図書館利用は認めていなかった結果であろう。

図表3 1日平均閲覧者数

年 度	開館日数(日)	閲覧者数(人)	1日平均(人)
明 42	289	22,178	76.7
43	322	11,213	34.8
44	327	24,591	75.2
大 1	323	19,495	60.4
2	317	18,609	58.7
3	315	13,853	44.0
4	326	15,829	48.6
5	303	6,183	20.4
6	130	520	4.0
7	207	6,210	30.0
8	192	8,640	45.0
9	204	6,000	29.4
10	173	450	2.6

『札幌区統計』『札幌区統計書』『札幌区統計一斑』より作成

ところで、この校舎の新築移転に関わり最大の疑問は、明治42年に建設された独立した建物としての石造書庫と閲覧室の存在である。『学校沿革史』では、移転に伴う文庫の件については一言も触れられていない。この件に関し、雑誌『札幌区教育会報』に校舎移転（大正6年）の年の12月の記事として、「屋舎移転等のため永らく休館中の戊申文庫は茲暫らく当校教室の一部を閲覧室に仮用することになった。書棚卓子、腰掛等の設備を整へ、新刊図書を購入して愈々去月23日から開館することになった」⁽³⁰⁾と校舎新築移転後の後始末も一応のメドが立ったことから、教室の一部を使用しての戊申文庫が去月、すなわち前月11月23日から再開されたことを報告している。つまり、明治42年文庫開館のときの建物は、再利用されなかったものとみてよいであろう。

文庫はこの再開を期に、「元来這種事業の創設は比較的容易で維持経営になって来ると仲々骨が折れる。該文庫も御多分に洩れず僅かに学校職員の寄附と保護者会の特別援助の下に辛くも命脈をつないで来た」⁽³¹⁾と、これまでの文庫の経営・維持の困難さと反省の上で、「そこで今度は経営の方法を考へ管理の組織を変更して事務員を廃し経費の最大限を図書購入費



写真 戊申文庫

に充つること」⁽³²⁾として、大正6(1917)年11月23日より実質的に学校図書館としての再スタートとなったものである。

「戊申文庫図書閲覧」の説明が付いている下の写真は、大正8(1919)年7月15日の創立記念式典挙行日に配付された『創立三十年記念写真帖』に収録されているものである。この写真にみる戊申文庫は、校舎新築移転後の教室の一部をもって再開された文庫の閲覧風景の一コマであって、明治42年スタート時の戊申文庫のものではない。しかし、この教室を使用していた戊申文庫も大正13(1924)年には、再度独立の建物を用意することになるのである(後述)。

こうして再スタートした文庫ではあったが、大正11,12年度は統計上では、開館日数と閲覧人数とが集録されていない。この間、大正9(1920)年4月から学校は、男女共学となったが、統計上では男子の数字が未集計である。これは、男子はまだ低学年ということで、文庫の利用を認めていなかったものである。大正12(1923)年には、校名を札幌市女子小学校から札幌市大通尋常高等小学校と改称し、大正13,14年と男女別で閲覧人数が集計されてくる。

6. 児童文庫への移行

『学校沿革史』大正13(1924)年には、文庫に関連すると思われる項目が記録としてのこされている。つまり、

- 1月26日 午前9時半皇太子殿下御成婚奉祝式挙行
- 7月14日 記念文庫落成式には寄附並に建築委員会開く
- 9月10日 児童文庫開設の件についての職員会あり
- 15日 児童文庫開館す

校舎新築移転後再開された5年後の大正11,12年は休館状態にあった文庫であったが、皇太子殿下御成婚という皇室の慶事に再度、全国的流れに便乗することで低迷する文庫再開の活路を求めたものであろう。この件に

関しては、『学校沿革史』ではこれ以上の記述がみられない。しかし、この僅かな記述であるが、「記念文庫落成式」「建築委員会」あるいは「児童文庫開設」等の文言から、従来の名称「戊申文庫」を改め「児童文庫」とし文庫経営の方針転換を図るとともに、そのための新しい独立の建物を用意し、文庫の再出発を意図してのものと推察できる。

その結果が、大正14(1925)年度からの『札幌市統計一斑』の「図書館及文庫」の統計項目の名称欄では、「大通小学校児童文庫」名で収録されることになったものである。しかし、大正13(1924)年9月児童文庫開館とすると、大正13年度の開館日数 150日は、ほぼ頷ける数値としても、先に述べたごとく閲覧人数の数値 125,600人はあまりにも突出したものとしてみえてくる。

昭和元(1926)～8(1933)年まで、今度は『札幌市統計一斑』からは完全に「大通小学校児童文庫」の名称が消えてしまっている。再度統計上に見えるのは、昭和9(1934)年度からとなってくる。このときも名称は、「大通小学校児童文庫」名となっており、統計項目の「図書部数」の「洋」の欄は、「—」と表示されている。これは、児童文庫としての再編による蔵書の再点検・整理の結果であるとみられる。

この空白の昭和元～8年までを『学校沿革史』でみると、

昭和5年 5月 4日 文庫室の壁にペンキを塗る

8年10月27日 文庫にて故岩村長官の遺書展覧会を開く

の2件が記載されているのみであるが、これによっても文庫が存在していたことが窺えるが、『学校沿革史』にはこれ以降、文庫に関わる記述が確認されない。

昭和4(1929)年11月発行の雑誌『札幌教育』に、「本校児童文庫経営の実際」⁽³³⁾と題するレポートが掲載されている。このレポートの署名は、「大通小学校」名による文字通りの児童文庫経営指針の紹介である。ここから

は、このレポートの分析を中心として、先に述べた大正13年以降の文庫の動向について検証を試みる。

このレポートによると、文庫はその目的として「本校児童文庫が教育の目的をよりよく達する事を其の目的としてゐることは云ふ迄もない。而して之がために、大体2方面のことを考へてゐるのである」として、「一は児童学習上の参考教材たらしめたいと云ふことであり、一は児童の感情陶冶の資たらしめようとする事である」と述べている。

すなわち、一つは学校教育を補完する学校図書館としての機能を、そしてもう一つは、「我が国現在の教育的傾向乃至は社会状態を顧ると感情陶冶の欠陥から起きた種々の問題がある」とし、「本校児童文庫に於ては感情の陶冶に資することも、亦決して軽んじてならぬ事と考へ」「将来に於ても学習参考書類の充実を計ると共に、文学書類の完備に努め以て所期の目的を達しよう」と計画されたもの、つまりは、読書を通しての児童の思想善導がその意図としてあったことを推察させる。

児童文庫としての施設は、次のものであった。

児童室（紙面の都合上平面図を省く）

- (1) 竣成 大正13年6月30日
- (2) 坪数 31坪本室28坪、玄関3坪
- (3) 外部 打付モータル塗、本部ペンキ塗
- (4) 工費 3,720 円

校舎の南西隅に建てられて、廊下伝ひに入館出来る様になっている。とある。文庫としての建物を校舎に付設して建設され、入館には校舎の廊下経路で入館することになっており、直接外部からの利用を想定していないことがわかる。つまりは、利用対象は同校の児童・生徒であることを物語っている。建物は31坪で、建築予算と共に、明治42年の戊申文庫と規模的には、ほぼ同程度のものとなっている。備付けの蔵書冊数は、780冊程に若干の雑誌ということで、今回の文庫は、書棚を閲覧室に備えることで

書庫は用意されてはいない。

ここでの、大正13年6月30日竣成の日付を、先の『学校沿革史』大正13年の年表に付け加えると、「大正13年9月15日 児童文庫開館す」との関連が明確となる。皇太子殿下御成婚という皇室の慶事に肖かった国家的慶事として、戊申文庫から児童文庫へと機能変更での再スタートが、「1月26日記念祝賀会」「7月14日文庫落成式」「6月30日文庫竣成」、そして「9月15日児童文庫開館」への一連の動向として見ることができる。

文庫維持・管理等の経費は、「毎年保護者及び職員の寄附と、保護者会より支出される200円内外の費用とに依って、図書を購入、修理、設備の改善その他すべてを経営して」おり、これは、戊申文庫としてスタートしたときと若干の閲覧料収入があった点を除き、経費の大半が保護者会に頼っているという点では基本的には変わらない。

新生なった児童文庫は、「閲覧室児童文庫」と「巡回児童文庫」の2種で運用された。閲覧室児童文庫は、新築された図書室を利用するもので、「比較的団体的訓練の行届いてゐる尋常5年以上の学年に」「毎週2回以上有志児童が、閲覧室に集合して、読書することに依って、公衆道德の訓練、自治の精神の涵養、図書選択の練習等、上学年として適當なる修養をなさしめ、児童文庫所期の目的を達しようとし」たものである。

すなわち、毎日放課後閲覧室を開放し、尋常5年以上の児童に対し週2回は利用するよう指導していたものである。利用は原則として閲覧のみとしたが、「高等2年の児童に対しては、毎週土曜日の放課後から、翌週月曜日の正午までを限り持出しを許して」いた。図書室の管理は、文庫係を置きこれに職員6名と当番児童、即ち高等2年男子が交代で毎日担当にあっていた。

もう一つの児童巡回文庫は、「比較的団体的訓練の出来てゐない尋常4年以下の学級に各自の教室に於て読ませようと」企画されたものである。これは、「読書の態度や図書の選択や団体的訓練を養ふ」ことと、「設備の

事情」すなわち、閲覧室の最大収容座席が70人分しか確保できないことによるもので、高学年の児童になるべく閲覧の機会を多くとの配慮によるものである。この児童巡回文庫には、閲覧室児童文庫用とは別に本箱6個に図書360冊と若干の雑誌を用意し、「当該学年に於て、与へられた本箱を各学級に巡回し、綴方、読方、図画、手工の時間に、或は昼食後の休憩時間に、之を利用」出来るようにしていた。

この利用指導には、学級教師が「級長副級長に適当な始末をせしめる等なるべく指導の自治に俟って」いる。おそらく、6個の本箱360冊分は、各学年毎に振り分けられ巡回されたものと考えられるが、巡回期間等その詳細は明らかとはなっていない。

この昭和4年11月にレポートされた児童文庫は、将来への展望として、「蔵書を豊富にすること」「設備を完全にすること」「利用の道を拡張すること」の3点をスローガンとし、「正科の課業以外の学習が各自の満足のゆく迄出来得る機関にしたい」と結んである。つまり、児童文庫として学外への公開も視野にいれていたものと考えられる。

戊申文庫の児童文庫としての再スタートは、昭和12年までは確実に継続されていた。

おわりに

従来、札幌女子小学校（現・大通小学校）の文庫に関する記録として、明治42(1902)年2月「戊申文庫開館」と大正13(1924)年9月「児童文庫開館」との記述に関し、その関連性などについての明確な説明がなされてはいなかった。本稿ではこの件に関し、明治42年2月戊申文庫新築開館、校舎新築移転後の文庫再開（大正6年11月）、そして文庫活動の低迷期をへて、児童文庫としての再スタート（大正13年9月）、というこれまでの疑問点に対し全体的な道筋を明らかにすることができた。

通俗図書館としての役割を担うべく設置された戊申文庫は、その実質的

活動期間は短かった。その後、活動の低迷を打破すべく努力の結果、児童文庫としてその役割を方向転換することで再スタートとなった。この間、一貫して文庫関係者が意図していたのは、戊申文庫設置の趣意ともいえる目的にある「今は単純な文庫に過ぎないが近き将来に於ては図書館規則に依る組織的のもの」を意識としてあった。この意図は、戊申文庫を児童文庫と名称もその機能も変更しての再出発に際しても、持ち続けていたが結局は実現にはいたらなかった。

こうした意識の背景としては、明治後期から顕著になってくる図書館を取り巻く時代状況が多分に影響しているといえる。そしてもう一つは、この戊申文庫に先立つ2年前に設置された札幌北九条小学校附属通俗図書館（明治40年9月開館、以下「北九条図書館」と称する）の存在があったと考えられる。

すなわち、戊申文庫に先立つ2年前にやはり通俗図書館としての役割を担うべく設置された北九条図書館は、その活動のピークが大正3～8年頃にかけてである。これに対する戊申文庫のピークは、開館当初の明治42～大正4年頃にあるとみてよいであろう。

地理的には、JR札幌駅（駅の位置は現在と変わっていない）を挟んで、南（戊申文庫）と北（北九条図書館）に位置する両図書館は、お互いの存在を意識することで、結果として、当時の札幌市における通俗図書館としての役割を地域的に分担し、あるいは、その活動の期間を相互に補完してきたと考えてもよいであろう。

しかし、両図書館とも、その試みや意図は必ずしも成功したとはいえない。その原因としては種々考えられるが、その大きな要因の一つとして挙げられるのが、当時の通俗図書館の半数以上が共通して抱える問題と同様の貧弱な蔵書冊数にある。特に、戊申文庫はその活動期間を通して2,000冊を超す蔵書を持つことがなかった。また、それをカバーすべき魅力ある蔵書を更新、維持する財政的基盤が確立されていなかったことも指摘でき

る。財政的基盤は、当然のごとく継続的安定的な文庫経営の基本要件でもある。それでも、この戊申文庫は北九条図書館と共に、これ以降の札幌市内各小学校等に付設される記念文庫の一つのモデルとして、その影響は大きなものであった。

近年、札幌市においても、都市中心部の空洞化あるいは、少子化による影響もあって市内中心部にある永い歴史を有する小学校の統廃合が進んでいる。そのため、各小学校の歴史的資料の管理等に少なからず問題を投げかけているのが現状である。これら歴史的資料は、その歴史的価値を考慮するとき、決して当該校だけのものではない。その学校を長年守り育ててくれた地域社会全体の共有財産として、その管理と有効な利用、活用をも含め次代に引き継ぐ早急な手だての必要がある。この度の資料の調査、利用にあたり、この点を特に痛感するものである。

本稿をまとめるにあたり、大通小学校には関係資料等の利用でお世話になった。ここに記して謝意を申し上げたい。

〈注〉

- (1) 谷口一弘「北海道における通俗図書館設立の経緯－札幌市立北九条小学校を例に－」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第34号 平成14年3月 p.41-78
- (2) 永末十四雄『日本公共図書館の形成』日本図書館協会 1984.4 p.64
- (3) 辻新次「新築書庫落成式演説」明治23年9月9日（『新編図書館学教育資料集成 第7巻 図書館史』 1998.3 p.54-57）
- (4) 大島美津子「地方制度」『講座日本近代法発達史』第8巻 勁草書房 1959.10 p.70
- (5) 「図書館施設ニ関スル訓令」明治43年2月3日 文部大臣訓令（『新編図書館学教育資料集成 第7巻 図書館史』 1998.3 p.62-64）
- (6) 『北海タイムス』第7299号 明治44年3月2日 p.4

- (7) 『創立三十年記念写真帖』札幌女子尋常高等小学校 大正8年7月15日
- (8) 『施設概要』札幌大通小学校 昭和14年10月10日 p.1
- (9) 『北海タイムス』第6426号 明治41年9月2日 p.7
- (10) 『北海タイムス』第6580号 明治42年2月14日 p.4
- (11) 同 上
- (12) 『学校沿革史』自明治36年度至昭和13年度 札幌市大通小学校
この資料は、札幌市史編纂室が原本からのコピーとして所蔵のものに依ったもので、原本とされる大通小学校所蔵のものは未見である。
- (13) 『北海タイムス』第6426号
- (14) 『北海タイムス』第7299号
- (15) 同 上
- (16) 『北海タイムス』第6580号
- (17) 同 上
- (18) 同 上
- (19) 『小樽新聞』第4810号 明治42年3月12日 p.1
- (20) 『北海タイムス』第6629号 明治42年4月6日 p.7
- (21) 文部省編『全国図書館に関する調査—大正10年3月現在—』（『復刻図書館学古典資料集 全国図書館に関する調査—大正10年3月現在—』日本図書館協会 昭和53年7月 p.9)
- (22) 『北海タイムス』第7299号
- (23) 谷口一弘 前提書
- (24) 『北海タイムス』第7299号
- (25) 同 上
- (26) 同 上
- (27) 『北海タイムス』大正1年12月24日（『新聞集成 図書館 第3巻—大正・昭和戦前編—』大空社 1992.10 p.29）

- (28) 北駕文庫は、当時の北海中学校（現・北海高等学校）の創設者で校長の浅羽靖の個人蔵書を基に明治44(1911)年11月、同校に設置公開されたものである。現在は、北海学園大学附属図書館が管理しているが、そのコレクションの内容には、松浦武四郎関係資料、北方関係資料等の貴重なものが多い。
- (29) 北九条図書館とは、明治40(1907)年9月、地区住民有志等の尽力で設置された札幌市立北九条尋常高等小学校附属通俗図書館を指す。詳しくは、〈注1〉の拙稿を参照されたい。
- (30) 『札幌区教育会報』第2号 大正6年12月20日 p.7
- (31) 同 上
- (32) 同 上
- (33) 大通小学校「本校児童文庫経営の実際」『札幌教育』第61号 札幌市教育会 昭和4年11月 p.13-15

〈付〉大通小学校戊申文庫関係年表

- 明治22(1889)年7月15日 札幌女子小学校開校（北1条西4丁目）
- 41(1908)年7月15日 同窓会、創立二十年記念文庫設置を企画
10月1日 記念文庫着工
- 42(1909)年1月 記念文庫竣工（閲覧室、石造書庫）
2月11日 記念文庫開館（名称・戊申文庫）
- 大正6(1917)年4月1日 校舎新築移転（大通西11丁目）
11月23日 移転のため休館中の文庫教室を使用し開館
- 12(1923)年4月1日 札幌市大通小学校と改称
- 13(1924)年6月30日 文庫閲覧室竣工
7月14日 文庫閲覧室落成式
9月15日 文庫閲覧室開館、児童文庫と改称